

私と郷土と文学

⑬

少年期を過ごした青森県野辺地町は、マサカリのカタチをした下北半島の付け根に位置し、陸奥湾に沿って走るJR大湊線の起点でもある。本州最北の下北半島は今から150年ほど前、戊辰戦争で新政府に敗れ、賊軍と蔑まれた会津人が移住を迫られた地としても知られている。

下北半島への思い

いく……、本書には「義に死すとも不義に生きず」を貫いた会津人のすさまじい生活が綴られている。読後感に重苦しいが、こうした困難な時代を生きた人々の記録はこれからの時代に重みを増してくるに違いないと思う。
下北半島が舞台の作品といえれば他に、寺山修二「田園に死す」の大霊場、恐山、水上勉「飢餓海峡」の断崖絶壁、弘法浦、井上靖「海峡」の津軽海峡を望む下風呂温泉、水上勉「北国の女の物語」の寒立馬が生息する尻屋崎、吉村昭「魚影の群れ」の大間マダロ一本釣り等々が思い浮かぶ。
下北半島の気候風土は不屈の意志を内に秘めた人間のドラマを紡ぎ出し、読み手の胸に迫ってくるものがある。田名部には柴五郎一家の居住跡があると聞く。陸奥湾から吹く風にあたりながら、いつの日かそこに立つてみたい。そのとき、眼に映る風景は何を語りかけてくるのだろうか。
(其田敏美)

風と歩こう ④

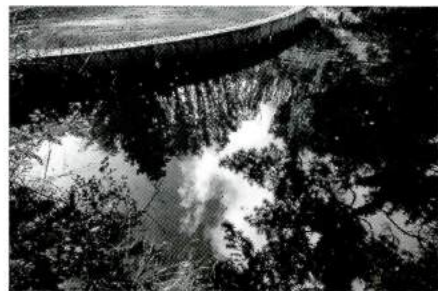


Photo by Ryuji Sasaki

木道を歩いて円形広場に出る。本当は野外石舞台というのだそう。天気が良い今日は、石も暖かそう。その石舞台の真ん中に立つ。グッと顎をあげて空を見る。空が丸く切り取られる。その円周に紅葉した梢が見える。さつきまで聞こえていた鳥の声が消える。風の音も消える。よく、水底から空を見上げるなんていうけれど、今は濁れ井戸の底から見える感じ。井戸に横穴でも空いていたらと想像する。

突然、子供のころの記憶がよみがえってきた。夏休みだったのかな。夕方一人で砂場を、ずっと、砂が土になっても、掘っていたことがあった。何を考えていたのだろう。探しに来た親に叱られて、埋め戻させられた記憶だけが残っている。顎を引いて息を吐く。音が戻ってきた。足下を落ち葉が軽い音で駆け抜ける。奥に見える、あれはヤマボウシだろうか。ハラハラという音はあれのこと、そういたくなるように葉を落としていく。

もう一度空を見上げていたら、視線を感じた。誰かに見られていたのかしら。
(和)

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第55号をお届けします。
▽奥羽越列藩同盟顕末「電は動かす」これは日本初世界一周を果たしたサムライ、仙台藩士の玉虫左太夫の話。270万石夢かなわず切腹。新政府は罪に問わなかったが個人の恨みによる報復が仙台から有為の人材を失わせた。
▽このところ政治家間のまじめな(?)討論を聞く機会が多い。回答者が質問の内容からずれて答えている場面を多く見聞きするにつけ、ホントに分らないのか、分らないふりで突破する「技術」なのが見極められない。主語をあいまいにする日本語の正確な使い方が問われている。
(近)

▽福島西インターを降りて、安達太良山の麓を回り猪苗代湖方面に走る。紅葉真っ盛りのドライブ日和、相方は同世代で趣味を同じくする友人だ。目的地は慧日寺跡と資料館、それと土津神社だ。今回で4回目の大人の社会科見学、いったいどこから話題が湧いてくるのか、行きも帰りも話が尽きない。充実した一日を過ごした。
(和)

▽一番町のビルの裏に、低い植栽を施した小さな空間がある。晴れた日、この通路を通るとセキレイが、一羽、尾羽を上下に振りながら餌をついばんでいた。
今年には政宗生誕450年だという。武將政宗はどのような思いで、花押にこの美しい小さな鳥を選んだのだろうか。会って聴いて見たい気がする。
(佐)

編集後記

文友の部屋

友の会文学散歩に初参加。度々窓から文学館の木々を眺めてはいましたが、外に出て小道を歩くと、これまでよりぐっとその素敵さが伝わってきました。「ああ、いい気持ち」なんだかとても優しい、嬉しい気持ちになりました。それは、秋晴れの青い空に白い雲、爽やかな空気が、緑と朱の木々、そして美しい歌声が私を包んでくれたから……。庭の楽しみ方発見の日。
(H)

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。インシヤルでの投稿も可です。

恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今年で第16回を迎える恒例の企画となりました。今年のテーマ部門は「旅」です。自由部門では、好きな作家や作品名、作品の一節、自作の詩や俳句などを添えた年賀状作品を募集し、館内で紹介します。
多くの会員のみなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますよう、お願いいたします。



文学の杜 仙台文学館 友の会会報 第55号 平成29年11月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内) 〒981-0902 仙台市青葉区北根2丁目7の1 電話 022(271)3020 仙台文学館のホームページ http://www.sendai-h.jp/

第58回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・高橋夢叶さん(仙台市) 晩翠あおば賞・高野慈さん(仙台市)

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第58回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月22日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、仙台市立南中山小学校3年高橋夢叶さんの「ポケットのひみ」 「荒城の月」の作詞や仙台市の「晩翠通り」で土井晩翠の名を知ることにはあっても、私人としての晩翠の生活の場面を垣間見ることはもはやできない。

晩翠忌記念行事

二人芝居『秋保村にて』(10月22日)

秋保村での回想に晩翠の心を見る

「秋保村にて」は、戦後の晩翠の日常を切り取ったものであった。出演は仙台市在住の俳優、戸石みつるさんと佐々木久美子さんである。

漢詩と和歌というそれまでの日本の詩のかたちが近代詩に変わること大きな

つ。晩翠あおば賞は、仙台白百合学園中学校2年高野慈さんの「地図」に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数706編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、仙台市・鈴木時登さん、宮城県登米市・鈴木雅華さん、宮城県登米市・門間奎斗さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・横谷柚生花さん、仙台市・古里琴奈さん、仙台市・山形菜津希さん。

影響を与えたのが、晩翠の詩だったというクマガイコウキ氏(演出)の解説を聴き、その後お芝居を観る。舞台は仙台空襲で家を失った晩翠夫妻が仮の住まいを置いた秋保温泉である。二人は磊々峽を眺めながら越し方を振り返る。



息子英一が提案した寄付金付きの慈善切手は、英一の亡き後愛国切手として実

晩翠が亡くなって既に60年以上が経つ。こうしてゆかりの詩人に思いを重ね、偲ぶ機会をつくり続けてゆくのは、仙台文学館であればこそその感慨を持ったひとときだった。
(佐)

文友一滴

渡辺祥子さんは毎年11月の満月の夜に朗読リサイタル月夜語りをしている。今回は青葉城跡本丸會館で開催された。タイトルは「政宗の見た月」。

私がお茶を習うようになったのは年をとるにつれ和ものに惹かれるようになったからだ。日本に生まれながら惹かれるというもおかしな話だけれど……

友の会随想

およそ四十五年前、シンガポールの病院で私は長男を生んだ。だが、肥立ちも悪く多くの方々の尽力を受けた。その中のお一人、海洋研究所のドクターとして派遣されていたSさんが、新婚だった私たち夫婦に、お近づきのしるし



賜わりし一冊の思い出

友の会会員 相澤 寿美子

にと、一冊の本を下さった。Sさんの恩師・内田恵太郎氏の著書「流れ藻」である。職場の専門書以外はなかなか入手できない日本語の本は、私にとって貴重であり、他の何よりも嬉しかったのを覚えている。常夏の国であっても一日の勤務は、朝の八時から午後の五時まで。職場から帰ると、まずソファーに横になり落ちて着いてから夕食の支度にとりかかる

逃げ場を用意してあげる優しさも大切ですよ。」との教えは、帰国後も折りにふれ生かされていた。当時、健康な夫は仲間とよく周辺国へ旅行したが、私は大冊「流れ藻」を読みすすめた。自分史的なエッセイだが、随所にある夫婦問答は面白く、十分に私を惹

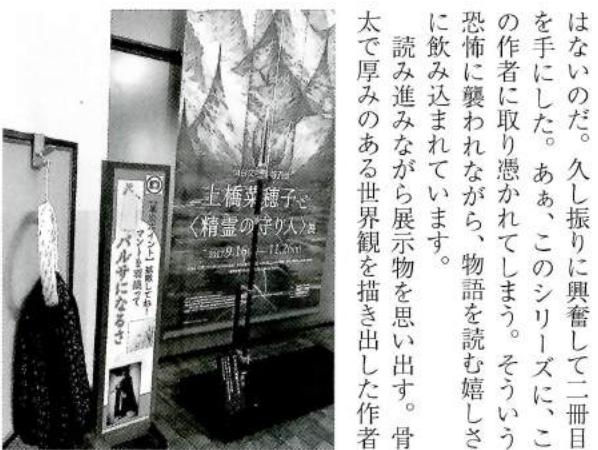
きつけた。例えば、夫「私は一人でいるのが好きだ。一人でいるとは、誰もいないところにいるという意味ではなく、自分の内面の世界に誰にも侵されずにいることだ。西田幾太郎博士の歌「世をはなれ人を忘れて吾はただ…」妻「己が心の奥底にすむ」この境地ですな。」夫「夫婦の間でもこれは同じだ。人格を尊重しつつ、互いにこの世界を侵さないことだ。」妻「その通りに私たちは暮らしています。」文中の内田ご夫妻のように、Sさんご夫妻は、ご高齢になった今も、歌や俳句をお詠みになり、日々の生活を楽しんでおられます。平成三十年元旦には、ご夫妻の歌で綴るご挨拶状が届くことだろう。きつと…。

真に受けていい噂

特別展「上橋菜穂子展」(9/16～11/26)

初めてその噂を耳にしたのはいつだっただろう。二昔くらい前かもしれない。それから何年かに一度くらい、彼女の話題がアンテナをかすめていった。その度に迷いながら、そのままにしていた。作家の肩書きや文学賞の受賞歴に惑わされてはいけない。作品を元に描かれる絵が、何だかゲームの世界のようだと感じるなんて、そこそが年齢を重ねて頭が固くなった証だった。

今回の展示は、その態度を後悔させるに十分なものであった。物語が生まれる舞台裏をのぞき見ているような印象を受けた。物語とはこうして生まれるものなのだ。世界は創り出すことが出来るのだ。人間を描くのは人間なのだ。そして、その全ては、長い時間の中で受け継がれてゆくものなのだ。展示を見て本屋に直行した。「精霊の守り人」だけを買った。そして、すぐに後悔した。どうして一冊だけにしたのだろうか。時間が出来たらゆっくり読もうなんて、もう止めなければいけない。そんな時が来る保証はどこにもない。少しくらい散らかっていても死ぬわけじゃない。物語を読む楽しさを犠牲にすること



井上ひさし資料特集展 vol.7

12月16日から企画展「井上ひさしの国語教室」を開催します。劇作家・小説家の井上ひさしが稀代の読書家・蔵書家としての側面をもつことは、よく知られています。その蔵書量は、のちに一つの図書館を建てることのできるほどでした。一方、その執筆活動を通じて、文章の読み書きや日本語について、徹底的に考え抜いた作家でもありました。井上ひさしは、(ことばとは、時間に対抗するための人間にとっての唯一の武器である)と考え、「書かれたものを読むことと過去がよみがえり、よみがえった過去に足を踏まえて未来に向けて書く。このようにしてわたしたちは「時間」と対抗する」「良い読み手ほど、良い書き手になるのである」「自家製文章読本」と述べています。今回の展示では、飽くことなく読み書きに対する探究を続け、読者へと発信した「ことばの専門家・井上ひさし」に着目し、その読書術、文章技法、読み書きに対する意識に迫ります。

10月31日(火)秋の文学散歩が行われた。今回は文学館敷地内にある3つの文学碑と、会報の「風と歩こう」に書かれた場所を歩くコースで、25人が参加した。散歩に先立ち、講習室で作曲家海鋒義美氏のご子息博美氏から、「海鋒義美音楽碑」についてお話を聞いた。歌碑に刻まれてある歌を博美氏のお仲間の三浦志寿子さんと小野寺禮子さんが歌い、続いてみんなで合唱した。次に会報のエッセイ「風と歩こう」3回分を渡辺祥子会長が朗読、各担当からの話があった。その後テラスから屋外へ出て散歩開始となった。文学碑の解説は文学館の庄司学芸員。

秋の文学散歩

文学館の庭と文学碑をめぐる

秋空に歌声ながれて



海鋒義美音楽碑前での記念撮影

「エドモンド・ブランデン碑」。英国の詩人で評論家の氏が、仙台滞在中に詠んだ「SEND AI」の英語の詩碑である。足元に落ちていたドンダリの多さにも目をとめて。平成23年に建てられた「扇畑忠雄碑」は福島県三春産のどっしりした青銅石。大震災の年の建立であり、改めて感慨深く碑をみつめた。

「風と歩こう」に書かれた池の水辺に向う。途中に円形舞台がありそこでも三浦さんと小野寺さんの二重唱に、参加者一同大感激。次は、大ヒマラヤ杉の下に集まった。見上げると松ぼっくりが何個もついている。いつも通るのに初めて見たという声があちこちから。根元で拾った枯れ枝がハロウィーンのとんがり帽の形状で、その偶然に一同が湧いた。

講習室に戻りお弁当をいただく。その後の感想では、文学館の自然を再発見、文学と歌の両方を楽しんだという声が多く聞かれた。(近)

第32回読書会

水上勉「越前竹人形」

竹人形にまつわる男と女の物語

水上文学を味わう

初めての水上勉作品である。時代は大正、舞台となる竹神は、福井県の山奥の小さな集落である。幼くして母親を亡くした喜助は、竹細工師の父喜左衛門と二人で暮らす。異常に背の低い父子であった。喜左衛門が死んだのは、喜助二十一歳の晩秋のことである。墓参りをさせて欲しいと訪ねて来た美しい玉枝との出会いは、喜助と玉枝それぞれの生活を思いがけない方向へと導いてゆく。時に切なく美しく、時に残酷に哀しく、物語は紅白の椿咲く竹林へと行き着くのである。

伝えようとしたのかよくわからない。実際には起こり得ないことのように思えて感情移入できない「人の心情に寄り添っている。現代には失われつつある人間関係を考えさせられた。竹人形の作り方や風景の描き方など、こまやかでみごとである」などの感想があり、喜助に関しても「男のエゴ」と断じる声もあれば「喜助は少年のまま大人になったのではないか」とする見方もあり、受け止め方は多様である。

描写の繊細さや美しさゆえか、抒情性が強く、映像を見ような場面も多い作品である。実際、過去にこの映画を見たという人も何人かいた。参加者それぞれの捉え方を自由に述べ合い、考えを押し付けられないのがこの読書会の特徴であり、楽しさでもある。この日も時間を忘れるほどの白熱したやり取りが行われた。10月11日、12名出席。(佐)



竹取物語や雪女などの民話的雰囲気を感じたという人が多く、そのためか「現実感がなく主人公の生き様がここに響いてこない。作者が何を

次回の読書会は12月13日(水)午後2時から。作品は三島由紀夫「美しい星」(新潮文庫)。※参加者は会員に限らせていただきます。申込みは友の会事務局まで。